

I	人生に共感し、チームで支援する
取組内容	○ 利用者一人ひとりに、これからどのように暮らしたいかを聞いて、その実現に向けた支援を約束し、チームで支援する また、利用者一人ひとりの人生を支援するためのガバナンスを強化する

具体的な取組状況と成果	
◆生育歴・人となりシートの作成	
<p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和4年度、全利用者の生育歴・人となりシートを作成した。 令和5年度から、担当職員による作成・見直し後、課長・寮長が確認し、園長を含めた園内事前協議、支援改善アドバイザーとのカンファレンスを随時実施した。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生育歴の理解と共感を支援の土台に据える方向性は明確になり、利用者の理解を深め、可能性を感じる契機になった。 	
◆利用者面談の実施	
<p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和5年6月から、利用者本人と園長、部長、課長、寮長、担当職員の面談を実施した。 令和7年度は、個別支援計画の見直し過程に合わせて、アセスメントに加え、個別支援計画の説明・同意の段階において全利用者との面談を実施することとして、実施方法を見直して利用者面談を実施するとともに、個別支援計画の作成を適切に行っていなかったことを受け、個別支援計画の策定過程に面談を位置づけ、計画と連動した形で実施方法を見直した。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和5年度は、全体の半数以上実施し、利用者一人ひとりが慣れない面談の場に臨み、職員の問いかけに耳を傾け、頷いたり、言葉で思いを表す場面があり、利用者の理解と共感を深める必要性や、生育歴の理解の不十分さなどを把握できた。 	
◆モニタリング会議の本人参加	
<p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> 相談支援事業所の相談支援専門員が開催するモニタリング会議について、令和5年度は泉寮の利用者が先行して本人が参加している。 令和6年度から、全寮で原則本人が参加することとしたが、当日の利用者の体調により参加できなかったことがあったことに加え、セルフプランの場合、相談支援専門員がいてもモニタリング会議が開かれていない場合がある。 令和7年度については、セルフプランの場合、相談支援専門員がいてもモニタリング会議が開かれていない場合を除いて、全利用者が参加できている。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 会議冒頭の挨拶や短時間でも会議の席に座り参加する機会を設けることで、関係機関に利用者本人の変化や可能性を感じてもらっている。 	

アクションプランの達成度を表す指標
課題
◆生育歴・人となりシートの作成
<ul style="list-style-type: none"> ● アクションプランの根底となる「利用者の人生を振り返り、利用者の人生を理解し、共感する」ことができるよう、随時見直しを重ねることとしたが、生育歴カンファレンスを通じた定期的・計画的な見直しまで至らなかった。 ● 要因として、担当者による作成・見直しを進めていても、課長等の園幹部職員が日常的に支援現場に入っていることや、令和6年度より医療・健康管理問題改革委員会から始まる緊急的な医療面での介入の必要性から医務統括による利用者のアセスメントも加わり、担当職員作成後のスケジュールや期限が不明確で全体の進行管理が十分でないこと等の課題があった。 ● 結果、生育歴・人となりシートの見直しは担当職員が随時実施していくこととしつつも、利用者の生活状況・健康状態等により複数回のカンファレンスを行う利用者もいれば3年間で1回のみとなった利用者もいた。また、入所前の生活、園での生活の様子や活動状況等、利用者ごとに作成内容の濃淡が生まれている。 ● さらに、個別支援計画の作成を適切に行っていなかったことや、直近でも一部の利用者に対して予防的な身体拘束が行われるなど、当事者目線への転換が道半ばであり、職員が利用者と向き合い、自ら成長し主体的に取り組を進めていける園運営をしていく必要がある。
◆利用者面談の実施
<ul style="list-style-type: none"> ● 令和5年度には半数以上の面談を実施したが、生育歴の理解が不十分であることが多く、家族等へのヒアリングやカンファレンスを含め、生育歴の見直し等の日々の業務に追われ、令和6年度は実施に至らなかった。 ● また、令和5年度に実施した面談を次年度に活かしたり、引き継いでいくことができておらず、面談すること自体の目的や必要性の理解を支援現場に浸透せず、園全体で面談に対する機運が高まらなかった。 ● 生育歴の作成や年度の業務に関わらず、実施時期や手順などを含めた園全体の進行管理が十分にできていなかった。
◆モニタリング会議の本人参加
<ul style="list-style-type: none"> ● 参加するだけでなく、会議の目的を本人や関係機関と共有し、充実化に向けた共通認識を持つ必要がある。 ● セルフプランの利用者に対する支援会議の検討が十分に進んでいない。
今後の方向性
<ul style="list-style-type: none"> ● 生育歴や人となりシートの見直しは、利用者面談を含めて個別支援計画の作成過程において園全体でマネジメントする必要がある。 ● 日常的に議論し、理解を深めていく文化の醸成といった利用者を中心とした園運営、マネジメントをする必要がある。 ● 支援の根幹となる生育歴の作成等については、サービス管理責任者の管理のもと、個別支援計画の見直しと連動させ、作成や面談を目的とするのではなく、支援や利用者の暮らしに反映させて評価するまでをマネジメントする必要がある。

参考：関連する実績値

内容	R 5 実績	R 6 実績	R 7 実績
生育歴・人となりシートの作成 (カンファレンス実施による見直し件数)	(R4全利用者作成済) 53／87 名	41／83 名	11／82 名
利用者面談の実施	69／87 名	0／83 名	21／82 名
モニタリング会議の本人参加 (R7 セルフプラン：10 名)	45／87 名	49／86 名	63／82 名

※令和 7 年度は 12 月末時点の実績

Ⅱ	暮らしをつくる
取組内容	○ 施設は、人が暮らす場であるということを意識し、園内での暮らしを再構築する また、地域での暮らしをイメージした園内の日中活動の充実を図る
	○ 施設が地域に溶け込んで、全ての利用者が日常的に地域に出て、仲間たちとのつながりや役割を実感できるよう、園外での日中活動の充実を図る また、利用者が地域生活をイメージできるよう、様々な体験の場をつくる
	○ 施設を居心地の良い環境に改善する
	○ 地域での活動を具体的に実現するための事業計画・行事計画を利用者と一緒に作成する

具体的な取組状況と成果	
◆原則開錠の徹底	
【取組状況】 <ul style="list-style-type: none"> ● 園内での役割のある暮らしを作っていく中で、それぞれの寮において、利用者一人ひとりのアセスメントを行いながら、施錠の必要性を見直し、日中の時間帯から段階的に開錠の時間を増やす等、寮出入口、ユニット出入口、トイレ、洗面等の原則開錠に向けた取組を進めてきた。 【成果】 <ul style="list-style-type: none"> ● 身体拘束は令和2年12月の61件から令和7年12月1件まで減少した。 	
◆オール中井デーの実施	
【取組状況】 <ul style="list-style-type: none"> ● 令和5年度は7月に、全ての利用者が施設を出る「オール中井デー」として、全寮で外出企画し、水族館、宮ヶ瀬、牧場散策等への外出を行った。 ● 令和6年度は6月に散歩やごみ拾い等を通じて地域で日中活動を、7月には津久井やまゆり園への献花（分散実施）を実施し、全ての利用者が参加した。 ● 令和6年11月以降は園内の活動班を単位に、地域のボランティア等と交流しながら、草を刈ったり、石を除外したりといった活動を協力して行い、園隣接地での農地の開拓作業を行った。 ● 令和7年度は、利用者一人ひとりの外出・園外活動の機会が確保できているか再確認し、活動の機会が少ない利用者について、「らっかせい」での活動を重点的に取り組んだ。 【成果】 <ul style="list-style-type: none"> ● こうした取組を通じて、外出機会の少ない利用者の園外活動の機会になるとともに、職員も利用者の園外活動、地域活動を意識し、利用者と地域で暮らすことを考える貴重な機会にもなった。 	
◆らっかせいの活動の充実	
【取組状況】	

- 施設の中で完結していた暮らしから、当たり前前に地域で活動する暮らしに向けて、令和4年11月に設置した秦野駅前の活動拠点「らっかせい」では、近隣地域の自治体、企業及び郵便局等の協力を得ながら、花壇整備や公園清掃等に取り組んだ。
- 設置以降、活動と並行して、近隣企業での清掃活動に加え、近隣商店街から集めた牛乳パックを使ったりサイクル活動、コーヒー豆の選別といった活動を増やし、活動の充実を図ってきた。

【成果】

- 活動に参加する利用者也年々増えており、着実に地域活動を積み重ねるとともに、令和6年度には家族会主催の「らっかせい」活動見学会を行い、利用者家族とも地域活動の意義や利用者の変化を共有した。
- こうした活動を積み重ねていくことで、行動面・情緒面とも利用者の変化が確実に生まれ、地域住民との交流が園の理解にもつながっている。また、職員の成長にもつながっている。

＜活動を通じた利用者の変化＞

- ・ 人との関わりの拡大と深まり
- ・ 荷物を分担・係を担う等、共同作業・役割をもった活動
- ・ 情緒の安定・集団への意識（待つ/合わせる/気にする）
- ・ 体力が付く（姿勢の保持、座りこまずに立って移動・活動）
- ・ 掃除等の作業が上手になっている
- ・ らっかせいの活動を通じて外部事業所への通所につながる

◆地域づくり・仲間づくり（農作業を通じた地域連携）

【取組状況】

- 近隣農家や他事業所との連携による農作業を通じた地域連携の取組として、3か所の畑を協働で運営し、「ロマンティック農園プロジェクト」として、農作業を通じた園外の活動を継続的に実施した。
- 令和6年度からは麦畑をJAとを協働で運営し、活動を広げるとともに、令和6年度下半期から農作業を通じた体験等、地域との交流の機会を作った。

【成果】

- 社会福祉法人の指導のもと、夏野菜等の苗植え・除草・水やり、収穫を行うとともに、一部はNPO法人の仲介で店舗直販にもつながっている。
- また、令和6年度からは休耕農地を活用した麦畑での活動を始め、種蒔き、麦の生育を促すための麦踏み、収穫体験を地域住民とともに活動し、収穫した麦をうどん等にして食べたり、ミニコンサートを開催したり等を通じて、地域との交流を図った。

◆外部事業所・グループホームの体験利用の促進

【取組状況】

- 日中活動の場所を施設外に広げるため、らっかせいや農作業を通じた地域連携を始めとする園外活動に加え、園外の事業所への通所、グループホームの体験利用も進めてきた。
- 令和7年度には体験利用を含め30名が通所しており、年々、園外に通所する利用

者は年々が増加している。

【成果】

- 利用者と職員が一緒になって園の外に出て、地域に溶け込んだ活動を増やしていくことで、利用者の笑顔や誇らしい表情など、いきいきとした様子が増えたり、活動を通して、できることが増えていく可能性を目の当たりにして、職員もやりがいを持って支援にあたるなど、意識の変化が現れてきている。
- 活動が続けてきた2名の利用者は事業所近くのグループホームに住まいの場も移し、地域生活移行した。

◆モデル寮の運営

【取組状況】

- 令和7年度から、行動障害の多い方が入所する特定の寮を園長直轄のモデル寮と位置づけ、日常的にモデル寮の全ての利用者が園外で活動し、地域とつながる実践を進めてきた。
- 令和8年1月からはモデル寮の活動と成果を参考に、全園的な日中活動の再編を行い、利用者にとってより適した活動の在り方や課題を継続的に検討する会議を設置し、利用者中心の再編を続けていくこととした。

【成果】

- 畑作業や清掃活動、流木を使った作品の制作等、モデル寮で率先して新たな活動を開拓するとともに、寮の利用者全員と職員が一緒になって地域に出ていくことで、仲間意識や活動への意欲の高まりが見られ、普段よりも長時間活動に参加できたり、これまで園外での活動が少なかった利用者也活動に参加することができている。
- 屋外での食事、余暇としての外食など園の外で過ごす機会の拡大を図っており、寮職員の刺激・意識向上につながっている。

◆利用者自治会等、当事者主体の活動

【取組状況】

- 令和5年度から毎月1回、全員参加の利用者自治会（ドーナッツグループ）を開催し、利用者と職員が一緒に司会を行い、園外活動の紹介、利用者の希望聴取、園行事・生活への反映、退所者の生活紹介等を実施した。
- 令和5年度下半期から、各寮や園外活動の紹介、暮らしや行事に関する希望の聴取、退所した利用者の紹介等、継続的に毎月開催した。
- 令和6年度には、利用者自治会に加え、利用者による参加型の体験事業を行った。具体的には和太鼓体験会、紙芝居（朗読会）、お琴演奏体験会などを行い、特に和太鼓は同好会としてやまゆり祭や県西文化事業でのステージ発表に繋がった。ちいきふくし博では利用者の作品が展示され、見学も行った。利用者による国政選挙などへの投票も自治体の選挙管理委員会の協力のもとで実施した。

＜利用者の参加人数状況＞

県政地区文化事業	R5（0名）	R6（0名）	R7（16名）
ちいきふくし博	R5（4名）	R6（8名）	R7（10名予定）
投票	R5（-）	R6（21名）	R7（16名予定）

- 生活向上委員会への利用者参加、他事業所見学と交流、他施設自治会の見学等も行っている。

【成果】

- 利用者の意見を運営・支援へ反映する土台ができ、当事者参加の機会が日常的に確保できた。

◆修繕・補修の迅速な実施

【取組状況】

- 各寮から挙がってくる修繕・修理依頼に対して園の管理課で日常的に対応
- 緊急的に対応が必要な修繕工事は園と本庁で協議しながら対応

【成果】

- 緊急工事は園と本庁が協議しながら迅速に対応している。

◆当事者目線に立った事業計画・予算を作成

【取組状況】

- 令和6年度から、アクションプランに沿った運営計画（事業計画・行事計画）を作成した。
- また、感染拡大予防の観点から予算を確保し、インフルエンザの予防的対応のためのタミフルの購入、コロナ感染症のワクチン購入を行い、希望者の対応を実現した。
- さらには、園内の修繕をこれまで以上に、速やか、かつ多くの実施をした。
- アクションプランの策定に伴い、園外活動・外出や健康診断等に係る費用は令和6年度の予算を確保するとともに、従来の慣例的な計画を改め、アクションプランの柱・取組に沿って整理し、計画として位置づけ直した。

【成果】

修繕の状況（園執行のものに限る）

年度	内容	件数	増減	金額(円)
R5	居室、食堂、DR床等床修理(海寮・泉寮・秋寮)、製氷機(山寮)・冷蔵庫(海寮)・エアコン(サービス棟)購入ほか	144	—	56,277,515
R6	らっかせい流し台・瞬間湯沸器設置、居室床壁クッション化、昇降式テーブル・シャワーストレッチャー・床ずれ防止用具購入ほか	157	109.0%	85,565,935
R7 (R8.1.30 まで)	塩ビシート部分張替(空寮)、家具クッション貼り・床CF貼り替え(海寮)、トイレブースアコーディオンカーテン設置(秋寮)、洗面所鏡設置(空寮)、食堂ロールスクリーン設置(海寮・秋寮)、居室床壁クッション化、移動式簡易浴槽・リフト浴設備の購入ほか	137	87.3%	90,259,168

アクションプランの達成度を表す指標

課題
◆原則開錠の徹底
<ul style="list-style-type: none"> ● 少しずつ開錠が進められているものの、依然として利用者が過ごす日中に施錠されている箇所もあり、幹部職員による園内ラウンドで、状況を確認し、状況が以前に戻っている場合は都度指摘し、チェックを継続している。 ● 取組は寮ごとの工夫に依存しており、園内で議論する場がないため、例えば他寮の相互点検や取組の共有、行動制限判定会議における議論等、園全体で踏み込んだ対応を進めていく必要がある。
◆オール中井デーの実施
<ul style="list-style-type: none"> ● 毎月実施を目指す中で、車いす利用者等の移動手段の確保が難しい、人数が多いことで活動場所が限られる等、全利用者が同時に活動する際の移動手段・活動場所・人員体制の課題が明らかとなった。 ● また、全利用者が同時に活動するための課題から、継続的な実施に至らなかった。
◆らっかせいの活動の充実
<ul style="list-style-type: none"> ● 活動する利用者が限られていたり、活動場所（想定する定員）や職員体制に対して参加する利用者が少ない等、運営上の改善も進め、活動のさらなる充実や新たな活動拠点の検討を進めていく必要がある。
◆地域づくり・仲間づくり（農作業を通じた地域連携）
<ul style="list-style-type: none"> ● 農作業による日中活動は継続できているが、農作業が中心となることで参加できる利用者が特定の方に偏りがちで、特に車いす利用者は参加しにくい等、参加機会の公正性・多様性の確保が課題である。 ● 活動が単なる農作業を行うことになりがちで、育てた農作物の販売や、収穫期等のイベントを通じた地域住民・関係機関との交流など、地域との関係づくりや、役割を実感できることに繋がる活動への展開・拡大を図っていく必要がある。
◆外部事業所・グループホームの体験利用の促進
<ul style="list-style-type: none"> ● 一方で、活動が続ける中で、利用者によって活動内容が固定化してしまっていたり、外に出ることが目的になってしまったりしていることから、らっかせい等の運営や利用者一人ひとりにとっての活動を振り返り、利用者と職員の次なる挑戦につなげ、より多くの利用者が地域生活をイメージできる体験を拡充していく必要がある。
◆モデル寮の運営
<ul style="list-style-type: none"> ● モデル寮の利用者が職員とともに日々園外で活動をするようになった一方で、他寮への波及が限定的で、園全体の横展開に至っていない。
◆利用者自治会等、当事者主体の活動
<ul style="list-style-type: none"> ● 今後、より利用者主体の自治会にしていくため、利用者の関わりを深める支援と、職員の意向聴取技術の向上が必要である。
◆修繕・補修の迅速な実施
<ul style="list-style-type: none"> ● 建物の維持管理に係る計画修繕工事も多岐に渡っており、日常生活に支障が生じない緊急際のない部分の修繕については対応ができていない。

- 本庁・園合同点検が実施できておらず、本庁も一体となって現況の精査、修繕の優先順位やバックアップができておらず、場当たり対応になっている。

◆当事者目線に立った事業計画・予算を作成

- 事業計画は、取組内容が多岐に渡り、担当や役割、スケジュールも曖昧だったため、その進捗状況を本庁も含め、十分に把握できておらず、計画と実行の進捗管理が十分にできていなかった。
- 予算について、利用者自治会等利用者の日中活動や外出の希望を聞き取っているものの、次年度の運営計画を作成する前に、次年度の予算調整が年度上半期から始まるため、次年度の運営を見据えた必要な予算の確保が難しく、結果として、運営計画と予算が紐づいていない。

今後の方向性

- 利用者が園外での活動に取り組み、活動の幅や利用者の暮らし、表情なども変わってきており、成果は出ている。
- 一方で、原則開錠の取組や外出・日中活動の企画運営などは、依然として寮や活動班、担当者に委ねられている傾向が強く、園として目標や目的を組織全体で共有し、活動を通じて得た気付きや課題を全園で解決していく取組ができておらず、利用者一人ひとりの支援を本質的に振り返り、見直すことにつなげていない。
- 園としての方針である事業計画の作成と予算との紐付けが不十分なことから、施設としての位置付けや権限、役割分担が曖昧となり、計画的な進行管理が十分に行われていない。
- 園としての方針である事業計画や予算との位置付けを明確にした上で、権限・役割分担を整理し、運営の施策が組織全体に共有され、同時に進行管理が機能する体制を構築する。

参考：関連する実績値

指標	R 5実績	R 6実績	R 7実績
原則開錠の徹底	【寮出入口】 原則開錠 3/5 か所 【ユニット出入口】 原則開錠 9/14 か所 【洗面台】 原則開錠 7/14 か所 【水栓】 原則開栓 10/14 か所	【寮出入口】 原則開錠 3/5 か所 【ユニット出入口】 原則開錠 9/14 か所 【洗面台】 原則開錠 7/14 か所 【水栓】 原則開栓 10/14 か所	(集計中)
オール中井デーの実施回数 ※職員、地域ボランティア含む	1 回実施 延べ 176 名 ※利用者83名、職員87名、 地域ボランティア6名	2 回実施 延べ 294 名 ※利用者 153 名、職員 141 名	未実施
らっかせいの活動実績	実人数 38 名 延べ 735 名 実施回数 215 回	実人数 53 名 延べ 1,161 名 実施回数 224 回	実人数 59 名 延べ 917 名 実施回数 176 回
農作業を通じた地域連携	農作業 延べ 355 名	農作業 延べ 863 名 地域イベント 3 回 延べ 105 名 ※麦踏み体験等 ※利用者 29 名、職員 18 名、地域住民等 58 名	農作業 延べ 552 名 地域イベント 2 回 延べ 54 名 ※麦の収穫体験・うどん 作り等 ※利用者 18 名、職員 7 名、地域住民等 29 名
外部事業所への通所 グループホームの体験 利用の促進	通所 19 名	通所 25 名 グループホーム 2 名	通所 30 名 グループホーム 2 名
身体拘束の実施件数	9 件	4 件	1 件
地域生活移行者数	1 名	1 名	0 名
外出機会の頻度 (1 人あたりの外出数)		一人当たり 平均 40.5 回/年 外出機会が少ない 利用者 15 名 (年 8 回以下)	(集計中)
利用者自治会の開催	6 回 延べ 24 名 ※4 回の延べ人数 (2 回は正確な人 数が未把握)	12 回 延べ 804 名	8 回 536 名

※令和 7 年度は 12 月末時点の実績

Ⅲ	いのちを守る施設運営
取組内容	○ 利用者一人ひとりのいのちを守るという強い意識をもって、利用者の生活を考え、支援する また、園の医療提供体制を見直すとともに、知的障がい者に必要な医療の在り方を検討する
	○ 虐待が疑われる事案や事故が発生した場合の対応を徹底する

具体的な取組状況と成果	
◆日常の健康管理	
<p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● コロナハイリスクリスト、頓服（てんかん発作時、不穏時、不眠時）一覧表、健康診断結果、眼科受診結果等のリストを作成し、園全体での健康リスクの見える化を進めるとともに、生育歴の作成を通して、利用者一人ひとりの健診結果等を経年で確認し、服薬開始時期・目的の再確認、てんかん既往や頓服薬服用状況の理解を進めた。福祉従事者として「利用者の小さな変化を見逃さない」を軸に、日常の健康管理を進めてきた。 ● 疾病や問題行動にだけとらわれなくて、その背景にある利用者の苦しさの原因を考えることを旨とした。行動障がいのある利用者に対し、問題行動を起こさないことを優先し暮らしを小さくし活動を制限してきたことが、結果として運動量低下、転倒、嚥下機能低下、低栄養、誤嚥性肺炎等の健康リスクにつながっていることを意識し、園内での暮らし、活動の充実を図る取組を進めてきた。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 健康診断等の利用者の健康状態をリスト化することにより、園全体での健康リスクの見える化が図れた。 ● 生育歴の作成と併せて、健診結果の経年推移や服薬開始時期・目的等の再確認を行い、健康課題を整理する土台を整えた。 	
◆食事支援	
<p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 歯科医師による摂食嚥下評価に加え、令和6年9月から言語聴覚士に毎月来園してもらい、食事場面での指導を受けている。 ● 食事リスクのある利用者リストを作成し、介助が必要な利用者が多い寮には他の部署の職員がスポット的に食事支援に入り、職員数を増やして対応している。 ● 食事場面の支援改善に向けた専門職の指導、研修の充実に向け、令和7年度は摂食・嚥下に関する研修の充実強化を図った。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 食事リスクのある利用者リストを通じて、日中活動を担当する職員も含めて、各寮の状況に応じたスポット支援・応援体制を組むことにより、リスクへの対応が進んだ。 	

<p>◆医療提供体制の見直し</p> <p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 令和6年11月に障害福祉分野で活躍されている医師を園の「医務統括」に、医療安全問題に関して実績豊富な看護師を「医務統括補佐」として配置し、健康診断・血液検査等の客観データを基に、医務統括アセスメントを毎週実施してきた。 ● 健康診断については、これまで複数の健診・検査を分散して委託していたものを、令和6年度からパッケージで委託し、健診結果を見やすくするとともに、骨密度測定を加えて実施するようにしている。 ● さらに、令和6年10月22日に「県立中井やまゆり園における医療・健康管理問題改革委員会」を設置し、健康管理・リハビリ・摂食嚥下等の各領域の専門家を委員として、健康課題に係るガイドライン作成や事故等を職員がためらわず報告できる仕組みづくりを目指している。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 医務統括・医務統括補佐を配置し、液検査等の客観データを基に毎週アセスメントを実施する体制を整備した。 ● 健康診断をパッケージで委託化したことで、健診結果が見やすく、職員の理解や家族への説明も円滑に行えるようになった。また、医務統括・医務統括補佐の助言を得ながら、骨密度測定の追加など、検査項目の見直しを図った。
<p>◆虐待が疑われる事案や事故が発生した場合の対応</p> <p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● リスクマネジメント委員会でハイリスク事案を検討し、庁内のデータ分析支援により事故要因分析手法等の検討を行っている。 ● 過去の事案を踏まえ、令和7年度は虐待防止マニュアルを見直した。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ロールプレイ等を含めた実効性のある対応へ改善が進んだ。
<p>アクションプランの達成度を表す指標</p>
<p>課題</p>
<p>◆日常の健康管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 健康リスクの見える化や医務統括アセスメントの整備は進んだが、医務課や専門職任せになりやすく、寮職員が主体的に利用者の健康状態を把握し、園内で報告・医療につなぐという意識・行動は十分に浸透していない。 ● 日々の記録（バイタル、食事、睡眠等）や健診結果を継続的に振り返り、心配であればためらわずに救急要請する等、異変に気づく力を底上げする必要がある。 ● 健康上の課題を医療的な対応に依存するのではなく、生育歴から利用者の元気だった様子を理解し、日々の活動を通じながら、暮らしを基本に健康管理に取り組む視点が必要である。
<p>◆食事支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 食中毒防止のために、2時間を経過した食事は廃棄する目安があり、本人の状態や急な通院などによって食事を摂れなかった場合の補食提供等、本人の目線に立

<p>った支援ができていなかったり、食事介助の基本的なスキルを習得する機会が乏しい状況があり、引き続き、意識改革と支援技術の習得を進めていく必要がある。</p>
<p>◆医療提供体制の見直し</p>
<ul style="list-style-type: none"> ● 利用者のいのちを守る上で、現場の支援員が利用者の異変に気づき、医療へ繋いでいく、心配であればためらわずに救急対応することが重要であり、そのために過去の元気だった様子も含め、生育歴を丁寧に理解するとともに、日々記録している体温やバイタル、食事摂取、睡眠状況などの記録や健診結果などを評価・振り返りをするなど、医務課任せにせず寮職員が利用者の健康状態を主体的に把握していく必要がある。
<p>◆虐待が疑われる事案や事故が発生した場合の対応</p>
<ul style="list-style-type: none"> ● 令和5年度、令和6年度に発生した虐待事案における初動対応等が不十分であり、迅速な通報、利用者の安全確保、園内調査を行うとともに、ロールプレイによる検証など当事者の目線に立った対応が課題となっている。 ● 令和7年度に虐待防止マニュアルを見直した後も、継続した研修等を通じて、現場に浸透させていく必要がある。
<p>今後の方向性</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 園全体での健康リスクの見える化を進め、医務統括アセスメントを通じて、利用者の機能低下、低栄養状態等の課題が明らかとなり、一人ひとりへの支援の見直しが進められている。 ・ 一方、過去の元気だった様子も含め、生育歴を丁寧に理解するとともに、日々記録している体温やバイタル、食事摂取、睡眠状況などの記録や健診結果などを評価・振り返りをする等、寮職員が利用者の健康状態を主体的に把握し、異変に気づき、医療へ繋いでいく必要があるが、行動変容が組織全体にいきわたらないという大きな課題がある。 ・ 健康リスクの見える化や医務統括体制の整備は進んだが、医務課や専門職任せとなりやすく、健康課題を暮らし（活動・食事・支援や関わり等）を基本に考えていく必要がある。 ・ 福祉職として最低限必要とされる医療の知識技術は利用者との関わりを通じて学ぶ必要がある。 ・ 利用者一人ひとりの健康課題について、医療的視点に偏ることなく、過去の生育歴や生活史を踏まえ、日常の暮らし（活動、食事、支援内容等）との関係性から捉える支援体制の構築を進める。 ・ 日々の記録や健診結果等を寮職員が主体的に評価・振り返り、変化や異変に気づき、医療に依存するのではなく、必要に応じて医療につなぐ仕組みをつくる。

参考：関連する実績値

	指標	R 5実績	R 6実績	R 7実績
日常の健康管理	医務統括アセスメントにおいて、新たに治療を開始した人数（高アンモニア血症）	0人	0人	9人
	低栄養状態が懸念される人数			
	アルブミン値 3.5～3.9	30人	18人	7人
	アルブミン値 4.0以上	46人	55人	71人
	白内障の人数			
食事支援	食事支援に配慮が必要な人数（全介助、一部介助）	47人	45人	45人
	嚥下評価実施数	延べ 85人	延べ 85人	延べ 96人
医療提供体制の見直し	医務統括アセスメントの実施		・週1回開催 ・全利用者のアセスメント実施	・週1回開催 ・全利用者のアセスメント実施中（2回目）
	外部通院した件数	486件	503件	317件
	救急要請した件数	15件	12件	15件
虐待が疑われる事案や事故が発生した場合の対応	園が虐待通報した件数	3件	1件	1件
	骨折した件数	4件	7件	2件
	事故報告件数	83件	153件	88件

※令和7年度は12月末時点の実績

IV	施設運営を支える仕組みの改善
取組内容	○ 利用者支援の質を評価する仕組みを構築する
	○ 職員の不安、悩み、ストレスを解消するための仕組みを構築する
	○ 利用者の望みを第一に考え、その暮らしや人生に寄り添う、当事者目線の支援を実践する人材を育成する
	○ 利用者の暮らしに合わせた人員配置体制や、利用者が暮らしやすい施設規模に見直す

具体的な取組状況と成果	
◆利用者満足度調査の実施	
<p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 令和5年度は、職員が利用者一人ひとりに対して、園での生活の満足度を聞き取る形で利用者満足度調査を実施していたが、職員が利用者に代わって回答することで客観性に欠けること、利用者へのフィードバックが不十分であること等が課題だった。 ● 令和6年度から実施方法を見直し、毎月開催する利用者自治会で、定期的に直接利用者の意見を伺い、随時支援へ反映する取組を開始した。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 利用者から挙がってきた意見は、各セクションで検討し、園の幹部会議で報告・検討し、具体支援へ反映させ、利用者や家族会においても報告して、利用者の声を施設運営に反映させる取組を進めている。 	
◆エラー&グッドプラクティス・レポーティングシステム導入	
<p>【取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 医療・健康管理問題改革委員会での議論を受けて、現場の職員が些細なことでもためらわず報告できる仕組み「エラー&グッドプラクティス・レポーティングシステム」を構築した。 ● 当事者目線で改善すべき事象を適時適切に把握し、多面的視点から改善と成長のスパイラルを回すことで、支援の質と利用者ウェルビーイング向上を図るため、令和7年2月から試行実施している。 ● 試行開始から約1年間で現場からのエラー、グッドプラクティス、ひやりはつとが1000件を超え、7月から1～2か月ごとに集計・フィードバックしている。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 試行導入し、約1年で1000件を超える報告が挙がっており、少しずつ報告する機運が高まってきている。 ● 1～2か月ごとの集計・フィードバックすることで、報告、集計、フィードバックの流れが動き始めている。 	

◆当事者目線の支援を実践する人材育成

【取組状況】

- 園内研修として、人権研修、虐待防止研修、摂食・嚥下の基本と食事支援、救急救命講習等を毎年実施し、令和5年度から、ICF（国際生活機能分類）を活用した研修を県立施設全体で実施している。
- 令和7年度は、研修計画を作成し、虐待防止に対する基礎知識の習得に加え、虐待事案等の振り返り等を行う虐待防止研修を盛り込んだ9月から研修を順次実施している。

【成果】

- これまで園内の各委員会に委ねてきた研修を、研修計画として定めるとともに、令和7年度は虐待防止や、園元利用者の死亡事案に係る検証チーム報告書に関する研修等を含め、園全体で研修を進める体制づくりが進んだ。

◆職場環境の改善（ハラスメントのない職場づくり、働き方改革等）

【取組状況】

- 令和5年度から毎年、全職員を対象としたアンケートを実施し、結果説明とともに、本庁職員と現場職員の意見交換を実施した。
- また、令和6年度から、県立施設従事者向けの相談を設置するとともに、ハラスメント相談窓口も案内するなど、現場の声を把握し、職場環境の改善を図る取組を進めている。

【成果】

- 全職員アンケートや、意見交換の場、相談窓口の設置など、職場環境の改善に向けた基盤づくりが進んだ。

◆利用者の暮らしに合わせた見直し（人員体制・業務の見直し・施設規模等）

【取組状況】

- 令和5年度、民間施設の職員体制・勤務体制を情報収集し、令和6年度に各寮の一日の流れ（現状と課題）を整理した。
- 令和7年度、独立行政法人の設立・運営移行も見据えて、引き続き職員体制、日中活動体制の見直しを進めている。
- 利用者の暮らしの場の確保に向け、令和6年度に県立グループホームの設置運営に向けた調査として、重度障害者を受け入れている事業者等へのヒアリングを実施し、受入の取組や収支状況等を調査した。
- さらに、利用者の園外活動の場として第2らっかせい（仮称）の設置を進めたが、予定していた場所の工事費が想定を大幅に超えてしまったこと、利用者の活動を中心とした新たな拠点の設置を考えていたが、らっかせいの活動を十分に振り返り、評価することができず、再度検討を進めていくこととした。

【成果】

- 令和7年度は、具体的なグループホーム設置に向け、利用者の選定、建物の要件、土地の選定等の調整を進めている。

アクションプランの達成度を表す指標

課題
◆利用者満足度調査の実施 <ul style="list-style-type: none"> 令和5年度は、職員が利用者に代わって回答する形になりやすく、本人の意思が適切に反映されているかという客観性、利用者へフィードバックし、改善に繋がっていないという課題があった。 令和6年度以降、利用者自治会で直接意見を伺う形としたが、集団の中で聞き方などを試行錯誤しながら進めており、一人ひとりの意思や感じ方を丁寧にくみ取っていく必要がある。
◆エラー&グッドプラクティス・レポーティングシステム導入 <ul style="list-style-type: none"> エラー&グッドプラクティスの共有は進めているが、改善につなげる議論・振り返りは寮に依存しており、日常的に報告と振り返り、内容によって組織全体で議論する仕組みとしては安定していない。
◆当事者目線の支援を実践する人材育成 <ul style="list-style-type: none"> 園内研修（法定研修・独自研修）も毎年実施しているが、人員体制等により参加者が限られてしまっている。 各委員会などで研修企画することで園全体の研修・人材育成計画が明確になっておらず、園の課題や支援現場のニーズを踏まえた計画的な研修になっていない課題がある。 園内の各委員会で企画をすることで、園の課題や利用者の暮らしを起点とした計画的な研修となりにくく、またシフト勤務により園内研修の充出席率は低く、職員に学びの機会を十分に提供できていない。
◆職場環境の改善（ハラスメントのない職場づくり、働き方改革等） <ul style="list-style-type: none"> アンケートや意見交換は実施しているが、意見として挙がってきた課題に対して、継続的な改善サイクルとして定着していない。
◆利用者の暮らしに合わせた見直し（人員体制・業務の見直し・施設規模等） <ul style="list-style-type: none"> 利用者の暮らしに合わせた職員体制や勤務割り振りの見直しを検討してきたが、具体的な試行にまで至っていない。 グループホーム設置に向け、利用者の選定、建物の要件、土地の選定等の調整を継続する必要がある。
今後の方向性 <ul style="list-style-type: none"> 利用者の声やエラー&グッドプラクティスを、共有・議論・改善・検証まで一体的に回す仕組みを整え、日常業務の中で改善が継続する風土を醸成する。 研修は、人員体制等により参加者が限られてしまっており、また、園全体の研修・人材育成計画が明確になっておらず、園の課題や支援現場のニーズを踏まえた計画的な研修になっていない。 研修を業務として位置付け、人員体制や勤務調整等の環境整備を進めるとともに、現場の課題や利用者の暮らしを起点とした研修体系を構築する 既存の外部通所などに繋がらない利用者の園外活動の場を引き続き検討する必要がある。

参考：関連する実績値

指標	R 5 実績	R 6 実績	R 7 実績
利用者満足度調査の結果	(集計中)	(集計中)	(集計中)
園内外研修の実施回数、参加者数	(集計中)	(集計中)	(集計中)

※令和 7 年度は 12 月末時点の実績